様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２１年５月２７日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2005～2008
課題番号：１７５２００２９
研究課題名（和文）　現象学的人間学の歴史的展開と現代における科学論的意義
研究課題名（英文）　Research on History of Phenomenological Anthropology and it's Contemporary Scientific Implications

研究代表者
音喜多　信博（OTOKITA NOBUHIRO）
椙山女学園大学・人間関係学部・准教授
研究者番号：６０３２９６３８

研究成果の概要：本研究は、20 世紀前半にドイツの哲学者マックス・シェーラー（1874-1928）によって創始された「現象学的人間学」の歴史的展開と、現代における科学論的意義についての研究である。この研究において、私は、おもにシェーラーの認識論・倫理学・形而上学と、現在の自然主義的な人間理解（とくに進化生物学に基づくそれ）とを対比して、シェーラーの議論のもつ現代的意義を積極的に評価した。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００５年度	1,000,000	0	1,000,000
２００６年度	800,000	0	800,000
２００７年度	800,000	240,000	1,040,000
２００８年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
総　計	3,400,000	480,000	3,880,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：哲学、哲学・倫理学
キーワード：哲学・倫理学・哲学的人間学・現象学・シェーラー・知覚・行為・価値

１．研究開始当初の背景

おおまかに言って、今日の哲学においては、自然科学（究極的には物理学）の成果によって人間的事象を統合的に説明していこうとする「自然主義」と、自然科学によっては人間の全体的な理解は得られず、人間的事象は自然科学とは異なる哲学独自の方法で理解されるべきだと考える「反自然主義」とが対立している。（後者の流れには、現象学や解釈学が属する。）そして、これらの二つの立場の間では、相互の議論のやりとりに乏しいというのが実情である。このようななかで、現象学という反自然主義的な立場に立ちながら、自然科学の人間研究の成果との対話を図ろうとしたシェーラーの試みは、大きな現代的な意義をもつものと思われた。

しかしながら、シェーラーが参照していた当時最新の自然科学は、ゲシュタルト心理学（W・ケーラーなど）や初期の比較行動学（J・v・ユクスキュルなど）などであり、人間理解の材料としてはいささか古いものとなってしまっている。そのため、今日では、現象学的人間学は時代遅れの思想として、あまり顧みられることがなくなった。しかし、私は現象学的人間学には大きな科学論的意味がはらまれていると考え、それを今日の自然主義全盛の状況のなかで、再評価すべきであると考えた。

２．研究の目的

本研究の目的は、「現象学的人間学」の歴史的展開を整理したうえで、その成果を現代の認知心理学や脳科学の知見と照らし合わせ、その現代的意義を評価するということである。具体的には、研究開始当初の目的は以下のようなものであった。(1)現象学的人間学の創始者としてのシェーラーの思想を整理し、(2)シェーラーが、L・ビンスヴァンガー（1881-1966）と M・メルロ=ポンティ（1908-1961）とにあたえた影響について検討し、(3)当時の学問状況のなかで、彼らが自然科学の成果、とくに心理学、比較行動学、進化生物学といった生命諸科学の成果を、どのように解釈していたかを明らかにする。そして、(4)今日の認知心理学や脳科学の成果をふまえるならば、これら現象学的人間学者たちの理論がどのように評価されるべきなのか、その科学論的意義を探る。

３．研究の方法

本研究は、研究代表者が単独でおこなう研究であり、その方法としては、当該の哲学者のテキストや二次文献の読解、および学会発表や雑誌論文というかたちでの研究成果の発表が中心となった。

４．研究成果

(1)研究の経過、および研究開始当初の目的からの変更点

「哲学的人間学」とは、ドイツの哲学者マックス・シェーラーが『宇宙における人間の地位』(1928 年）において提唱した哲学の立場であり、哲学の伝統のなかに現れたさまざまな人間観と、新しい人間諸科学（とくに生物学や心理学）の人間理解との綜合をめざす分野である。シェーラーは、自らの分析に E・フッサールの現象学の方法を応用しており、シェーラーの立場は「現象学的人間学」と呼ばれるべきものである。シェーラーは、意識や身体性についての現象学的分析の成果と、20 世紀の上四半世紀までに登場した新しい生命諸科学の成果とを綜合して、その後の現象学の展開に大きな貢献をなした。現象学的人間学は、歴史的には A・ゲーレン、ビンスヴァンガー、メルロ=ポンティなどといった哲学者・思想家に継承されて、発展していった。

研究開始当初の計画では、シェーラーのみならず、メルロ=ポンティやビンスヴァンガーの思想をも独立の主題としてあつかう予定であった。しかしながら、そのことによって研究の主題が分散してしまう恐れが出てきた。そのため、研究期間の途中から、本研究においては現象学的人間学の創始者であるシェーラーを中心にあつかい、メルロ=ポンティやビンスヴァンガーについては、付随的に言及するにとどめることとした。

また、当初の研究計画では、J・J・ギブソン、F・ヴァレラ、G・M・エーデルマンといった個別の経験科学者と、現象学的人間学者の思想とを対比させる予定であった。しかし、このような方向で研究を進めても、いたずらに議論が細部にわたり、現象学的人間学がもつ全体的意義についての議論が十分にできない可能性が出てきた。そこで、つぎのように研究計画を変更した。これらの経験科学者たちは、表象主義や計算主義を批判して、認知機能の「身体化（embodiment)」を強調する認知研究の流れに属している。この流れに属する研究者は、多かれ少なかれ心理学には生物学的基盤、あるいは進化論的基盤が必要であるという前提に立っている。そうであるならば、これらの研究者たちの理論を個別にとりあげるよりも、彼らが前提としている進化論的なものの考え方そのものと、現象学的人間学との対比をおこなったほうが、より綜合的・包括的な議論ができるのものと思われた。

今日、とくに進化生物学の成果を中心にして、認知心理学、脳科学、分子生物学等々の分野が人間理解において統合を遂げつつあるが、そのことに呼応して哲学の認識論や倫理学の分野でも変革がおきつつある。本研究では、このような新しい自然主義的な哲学潮流、とくに「進化論的認識論」(F・M・ヴケティツ）と呼ばれる分野とシェーラーの思想を対比することによって、「現象学的人間学」の現代的意義についての考察をおこなうこととし、上記の個別の経験科学者たちについては付随的に言及するにとどめることとした。

私は、シェーラーの思想を大きく下記の(2)から(5)の領域に分けて、まずはそれぞれの歴史的成立過程について概括的な整理をおこない、つぎにそれらの現代における科学論的意義を評価した。以下に、それぞれの領域に関連するシェーラーの主要著作名をあげたうえで、具体的な研究成果を記していくこととする。

(2)知覚論・認識論

(『倫理学における形式主義と実質的価値倫理学』(1913-1916 年)、「認識と労働」(1926 年）など))

20 世紀初頭までの脳科学や経験主義的心理学においては、知覚は単純に受動的な反射的過程にすぎないものとされており、人間の知覚経験は機械的過程として局所論的・要素還元主義的に説明されていた。ところが、20 世紀に入ると心理学内部にもこれを批判する動き、すなわち全体論的立場をとるゲシュタルト心理学が登場した。シェーラーは、ゲシュタルト心理学の議論をも参照しながら、みずからの現象学的な知覚経験の記述に基

づいて要素主義的心理学を批判し、動物が能動的に環境へとはたらきかける「行為」の一環として知覚を捉えるべきことを主張した。同時にシェーラーは、人間の認識のはたらきは主知主義的な合理主義的哲学が考えるような純粋な知的作用であるのではなく、情動的・衝動的な層を基底にもつプラグマティックな生命的作用であることを主張した。従来あまり注目されることはないが、このようなシェーラーの研究方向は、メルロ=ポンティの身体論に継承され発展させられていった。

さて、私はこのようなシェーラーの研究動向を現代の人間諸科学の成果と比較して、つぎのような考察をおこなった。現在、脳の機能の局在部位が明らかになるにつれて、ゲシュタルト心理学のような全体論的心理学は時代遅れのものになったように思われる。しかしながら、今日の脳科学においては、脳の機能の局在部位を明らかにするような研究は一段落し、ひとつの全体的な生命的機能を実現するために、それぞれの領野がどのように連合しているかということに研究の力点が移りつつある。その際、知覚を生命的行為として捉え、認知機能の発達を進化論的観点から捉える必要が謳われるようになった。このような流れのなかで、認知を主体と環境との相互作用として捉える「生態学的心理学」（ギブソン）や「エナクティヴ・アプローチ」（ヴァレラ）も登場したのである。また、今日の認知科学においては、感情は単に認知を妨げるものではなく、合理的判断において重要な役割を果たしているということが、進化生物学的な観点もふまえた脳科学研究によって明らかになってきている（A・R・ダマシオ）。このような意味で、シェーラーの現象学的研究は先駆的な科学的意義をもっていたと言えるのである。

(3)倫理学

（『倫理学における形式主義と実質的価値倫理学』など）

シェーラーは、倫理学の第一の課題は価値の分析にあると考えたが、このような立場は新カント学派（H・リッケルト、W・ヴィンデルバント）の価値哲学から継承したものである。シェーラーによれば、当時主流であった功利主義や形式主義的な義務論はみずからが前提としている価値について無自覚であり、人間の道徳経験に忠実であるとは言えない。そこで、シェーラーは、みずからの立場を「実質的価値倫理学」と呼び、価値経験の現象学的な記述に従事した。また、シェーラーは、価値は知的に認識される以前に感情的に「感得」されるものであるとして、彼独自の「情緒主義」を提唱した。

シェーラーは、人間が感得する価値は「快適価値」、「生命的価値」、「精神的価値」、「聖なるものの価値」という階層構造をなしているとしている。従来の自然主義（生物学や精神分析学など）は、「快適価値」や「生命的価値」までしか認めることができず、人間的な価値もそれらへと還元してしまっていた。このような流れのなかで、倫理学の分野では功利主義が主流となったのである。これに対して、シェーラーは人間の捉える価値の多層性を強調し、それらが生命的価値に還元されえないことを強調した。このことは晩年の『宇宙における人間の地位』における生命の階層理論において、さらに発展させられている。

さて、自然主義的な還元主義に抗して価値の多層性を強調すること自体は正しいと思われるが、シェーラーは上位の価値が下位の価値を基礎づけるという基礎づけ関係を提唱している。私は、このようなシェーラーの理論は、カトリックの精神主義・人格主義に基づいて形成されたものであり、哲学的に正当化できない予断が含まれていると考え、この点においてシェーラーを批判している論者の見解を検討した。たとえば、N・ハルトマンは、シェーラーの基礎づけ関係は逆であり、低位の価値のほうがまずは先行的に満たされなければならない価値であるので、むしろ低位の価値のほうが高位の価値を基礎づけると主張している。また、H・ライナーは、シェーラーが価値の位階を「アプリオリ」と表現したこと、すべての価値を感情によって感得されるものと見なして理性のはたらきを軽視したことなどを批判し、価値判断における感情と理性の協働のしかたを詳細に記述している。

さて、当時の自然科学は、客観的に存在するのは物理的実在のみであり、人間的価値は「主観的」、「観念的」なものにすぎないので、それについての厳密な学問は存在しえないと考えていた。ここから、価値の「相対主義」が帰結する。シェーラーは、このような相対主義を批判して価値についての客観主義を主張する。シェーラーは、現象学の志向的分析の方法を価値経験の分析に応用して、価値が意識を越えたものとして意識にあたえられているさまを記述した。私は、このようなシェーラーの構想は、現代の英米圏のメタ倫理学における「道徳の実在論」（J・マクダウェル、H・パトナムなど）に近いものであると考え、両者の共通点を指摘した。

(4)存在論・形而上学

（「認識と労働」、「観念論-実在論」（1927 年）など）

シェーラーは、「観念論-実在論」において古典的な実在論も観念論も否定する。古典的な観念論は、実在を個々の主体の意識によって構築されているものと見なす点において

誤っている。われわれが「実在」という概念によって理解しているものは、個々の意識を越えており、個々の意識に相対的な現象なのではない。古典的な実在論は、実在がわれわれの意識から独立に存在することを主張する点において正しいが、どこかに完成された世界があって、われわれの認識を待っているのみと考える点において誤っている。この誤った前提に基づいて、認識論においては「真理の対応説」が生ずることとなる。

シェーラーによれば、これらの学説に共通している誤りは、実在性を「意識」の対象の問題として、つまりは知的認識の問題として捉えている点にある。これらの学説に反対して、シェーラーは「実在」を生命的なものとして捉える。つまり、実在性の経験は、生命主体の中枢的衝動に対する「抵抗」の経験としてあたえられると考える。したがって、「実在」は「意識」にではなく、「生」一般に相関的な概念なのである。

私は、このように実在を生命的存在に相関的なものとみなすシェーラーの考え方の由来と意義を検討した。その結果、この考え方は、W・ディルタイの「実在性問題」についての哲学的研究と、ユクスキュルの「環境世界論」とをシェーラーが再解釈することによって成立したということが明らかになった。ユクスキュルによる「環境世界」についての研究によって、それぞれの生物によって知覚される環境世界は、それぞれの生物の「衝動的-運動的」構造によって規定されており、それぞれその様相を異にしていることが明らかにされた。シェーラーによれば、実在とは、それら個々の生物が一般に前提としているものであり、個々の生物がそれぞれの身体的構造に従ってそこから何かを切り取ってくる源泉のようなものである。この考え方は、現代の進化論的認識論（とくにヴケティツ）の実在性概念に極めて近似している。

このように、シェーラーの構想する実在的世界は、古典物理学における静的な客観的世界ではない。シェーラーによれば、古典物理学の考えるようなデカルト的「物体」の集合としての世界は、特定のサイズ、特定の身体的構造をもった人間という生命体に相対的な自然的世界からの抽象によって構想された世界に過ぎず、普遍性をもたない。シェーラーは、量子物理学におけるエネルギーの概念を援用して、真の実在世界を「力」の場と見なす。また、古典物理学の世界では生命はあくまで例外的現象とみなされ、生命は物理的存在に還元して説明されるが、シェーラーはむしろ、世界を生命一般に相関的な動的世界として捉えるのである。

この点において、シェーラーの「実在」概念は、A・N・ホワイトヘッドの「プロセス」概念や P・テイヤール・ド・シャルダンの動的宇宙観と共通のものをもっていることが分かる。テイヤール・ド・シャルダンが提出した目的論的コスモロジー（「オメガ点」）は、空想的思弁であるとして進化学者たちによる激しい批判にさらされたが、生物を必然的に生み出す宇宙という彼の考え方については、今日では量子物理学や複雑系の研究者たちの宇宙論（たとえば「人間原理」をめぐる議論）のなかで、あらたな形でとりあげられていることには注目すべきである。

(5)自然界における人間の位置づけについて（『宇宙における人間の地位』など）

生物学は、人間と他の動物の身体的機構を比較研究することによって、両者のあいだの連続性を強調する。しかし、シェーラーは両者の行動様式の差異に着目し、人間の特殊性を「世界開放性」という用語によって規定した。シェーラーによれば、動物は本能によって規定された一義的な「環境世界」（ユクスキュル）に拘束されているが、「精神」を備えた人間の「世界」は無限に開放的な構造を備えているという。

私は、今日の霊長類研究の進展などを考慮に入れるならば、人間と他の動物とのあいだの断絶を強調するシェーラーの宇宙観をそのままの形で承認することはできないと考えている。しかしながら、そこには今日的に見ても重要な科学論的観点がはらまれている。シェーラーは、「世界開放性」、「精神」という用語によって、人間の文化が生物学的なものから発生しながらも、それを越えた自律的な秩序を獲得することを強調している。このことから私は、晩年のシェーラーの宇宙論を、今日の生物学における遺伝的進化と文化的進化の関係をめぐる議論と関連させて解釈しなおす可能性を提唱した。たとえば、R・ドーキンスは、「ミーム」概念をもちだすことによって、文化的なものが遺伝的進化から自立していることを表現している。シェーラーは、人間は「絶対的存在者」のふたつの属性であるところの「精神」と生命的「衝動」とが出会う場であるとしているが、これは人間を「ミーム」と「遺伝子」というふたつの自己複製子の「乗り物」と見なすドーキンスの議論に近似している。さらに、E・O・ウィルソンは、この二つを単に並行させるのではなく、共進化の関係にあると考えて「遺伝子-文化共進化」の仮説を立て、経験的な研究の対象としている。シェーラーは、人間の歴史の生成を「精神」と「衝動」との相互交渉の場と考えて、人間が自覚的にこの歴史に参画することのなかに倫理の基盤を見いだしているのだが、このようなヒューマニズムはじつはウィルソンの倫理観と共通するところがあることが明らかになった。

(6)本研究の国内外における位置づけとインパクト

以上のようなかたちで、私はシェーラーを中心とした現象学的人間学の歴史的展開を整理し、その現代的な科学論的意義を明らかにした。この研究成果のインパクトをあげるとすれば、つぎのようになろう。

まず、本研究は、従来は個別の領域として相互に関連づけられることがなかったシェーラーの認識論、価値倫理学、形而上学を一貫した視点のもとから再構成することをめざした。それらの研究領域は、けっして孤立したかたちで存在していたのではなく、一貫した存在論のもとに統合されていたということを、本研究は明らかにした。しかも、それが今日の自然主義的な認識論、倫理学、存在論とどのような関連をもつのか、ということを英米圏の議論もふまえながら明らかにしたことが、本研究の独創的な点であると言える。

つぎに、従来、哲学的人間学は、人格主義的観点や実存論的観点から研究されることが多く、科学論的な観点からの研究はあまりなされてこなかった。このような研究動向のなかで、あえてシェーラーと当時の生命諸科学との交叉そのものを歴史的研究の対象としたことも本研究の独創的な点であると言える。本研究によって、じつは哲学的人間学という分野は、当時の経験科学やそれと結びついた実証主義思想によっては正当に表現されていなかった人間の全体性を回復しようという試みであり、経験科学のパラダイムの変革をめざすものであったということが明らにされた。

もちろん、シェーラーの思想は、進化の総合説も一般に広まっておらず、ましてや DNA の存在も明らかになっていなかった時代のものであり、また汎神論的な宗教的含意をもっているため、そのまま現代の生物学思想に結びつけるわけにはいかない。しかしながら、当時の自然科学の還元主義的な人間理解に抗して反自然主義を唱えていたシェーラーの議論が、今日の進化生物学を中心とした学の統合状況を予見するようなものであったということは興味深い事実であり、この点を明らかにしたことは、従来の研究にはない成果であったと思われる。

(7)今後の展望

本研究は、とくにシェーラーを中心とした現象学的人間学の内実を原テキストに忠実に整理し、それが現代の科学的研究とどのような関連をもっているかということについて、ごく基礎的な概観をおこなったにすぎない。今後は、本研究で得た知見を哲学・倫理学の議論の今日的な文脈のなかで応用していく必要があると思われる。現段階では、ふたつの研究方向を考えている

①「現象学の自然化」をめぐる議論

近年、洋の東西を問わず、現象学の成果を認知科学や神経科学の成果におきかえる「現象学の自然化」についての研究が盛んになりつつある。こうした研究は、ともすれば、経験科学の方法論的基礎について批判的に検討するという現象学本来の根本動機を棚上げしてしまって、現象学者が記述した事象とこれらの経験的アプローチが扱う事象の類似性をとりあげることに終始しがちである。これに対して、私としては、現象学者が生物学や（心理学を含む広い意味での）生命諸科学に対して、どのようなかたちで批判的に対峙していたのかをきちんとふまえたうえで、「自然化」のあり方を検討していく必要があると考えている。つまり、事象の類似性だけに注目するのではなく、自然主義と反自然主義をめぐる哲学的な議論をふまえながら、「自然化」を考える必要があるのである。私は今後、本研究の成果を生かしながら、この「現象学の自然化」をめぐる議論に対して具体的な貢献をなしたいと考えている。そのなかで、上記(1)の研究計画の変更によって本研究では遂行できなかった課題、つまり、シェーラーの思想とギブソン、ヴァレラ、エーデルマンなどといった個別の経験科学者の思想との詳細な対比をおこなうという課題にも着手したいと考えている。

②生命・環境倫理学との関連

私は、シェーラーの価値倫理学の成果が生命倫理学や環境倫理学の基礎となりうると考えている。たとえば、人間が感得する価値の研究は、環境倫理学における自然の「内在的価値」をめぐる議論などと関連している。環境というものを、単なる古典的な意味での物理的実在物としてではなく、生物の行為の相関者として捉える考え方は、ディープ・エコロジーなどの環境思想の哲学的基礎となるように思われる。さらに、今日では、ヒト遺伝子の改変の問題や動物の権利の問題が取り沙汰されているが、これは人間を自然科学によって単純に他の生物と連続した存在として捉えたり、逆に（カント由来の）人格論や権利論に見られるように、人間を生物の世界から切り離して捉えたりするだけでは解決できないように思われる。たとえば、人間の道徳は、霊長類などとも共有している共感の能力を基礎に成り立っていることが明らかにされているが、それに還元し尽くすこともできない。倫理学の問題は、生物学の成果をふまえたうえで、われわれが人間の地位をどのように評価するかという価値づけの問題でもある。私は、このような観点から、シェーラーの議論をあらためて現代の英米圏の哲学と対比させて再解釈し、生命・環境倫理学の基礎となる研究をめざしたい。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）
① 音喜多信博、マックス・シェーラーの価値倫理学における「価値」と「感情」、人間関係学研究（椙山女学園大学人間関係学部・大学院人間関係学研究科）、第 7 号、2009 年、107-116 頁、査読なし
② 音喜多信博、文化的進化の自律性と倫理―E・0・ウィルソンの「還元主義」に抗して、金城学院大学キリスト教文化研究所紀要、第 11 号、2008 年、21-35 頁、査読あり
③ 音喜多信博、後期シェーラーの知覚論―「認識と労働」をめぐって、思索（東北大学哲学研究会）、第 38 号、2005 年、67-90 頁、査読あり

〔学会発表〕（計６件）
① 音喜多信博、E・0・ウィルソンによる「倫理」の還元主義的説明に対する批判的コメント、第２回統摂苑シンポジウム「知の統摂・統合について―韓国と日本におけるE・0・ウィルソンの理解を中心にして」、2008 年 11 月 22 日、梨花女子大学（韓国・ソウル）
② 音喜多信博、現象学的価値倫理学における価値と感情、玉川大学脳科学研究所・脳科学リテラシー部門第４回研究会、2008 年 10 月 12 日、玉川大学
③ 音喜多信博、マックス・シェーラーの実質的価値倫理学について、第 22 回現象学を語る会、2008 年 2 月 23 日、仙台市民会館
④ 音喜多信博、E・0・ウィルソンの「倫理」観に対する疑問―哲学的倫理学の立場から、金城学院大学キリスト教文化研究所シンポジウム「知の統合へ向けて」、2007 年 12 月 20 日、金城学院大学
⑤ 音喜多信博、マックス・シェーラーの哲学的人間学、玉川大学脳科学研究所・脳科学リテラシー部門第１回研究会、2007 年 5 月 6 日、玉川大学
⑥ 音喜多信博、マックス・シェーラーの「哲学的人間学」再考―「人間中心主義」をめぐる問題、東北哲学会第 56 回大会、2006 年 10 月 22 日、山形大学

〔図書〕（計１件）
① 中山剛史・坂上雅道 ほか 15 名（共著、11 番目に掲載）、脳科学と哲学の出会い―脳・生命・心、玉川大学出版部、2008 年、168-184 頁

〔その他〕（計２件）
学会発表要旨
① 音喜多信博、E・0・ウィルソンによる「倫理」の還元主義的説明に対する批判的コメント（発表要旨）、金城学院大学キリスト教文化研究所紀要、第 12 号、2009 年、33-40 頁
② 音喜多信博、マックス・シェーラーの「哲学的人間学」再考―「人間中心主義」をめぐる問題、東北哲学会年報、第 23 号、2007 年、101-103 頁

６．研究組織
(1) 研究代表者
音喜多　信博（OTOKITA NOBUHIRO）
椙山女学園大学・人間関係学部・准教授
研究者番号：60329638
(2)研究分担者
なし
(3)連携研究者
なし